

レジデントの情景

MY LIFE IN NEW YORK

NYU歯学部病棟ER (休日歯科診療)

白 賢 Hyun Baek
ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院

NYラクロス会

ニューヨークでは、さまざまな会合や勉強会などが日々開催されている。月に一度コロンビア大学を会場とし、各業界で学び活躍する芸術家やビジネスマン、研究者を招いて、日本人若手の有志がボランティアで勉強会を催していたり、スポーツを通じた日本人同士の交流も盛んだ。野球やサッカーはもちろん、マイナースポーツであるアメリカンフットボールやラグビーでも経験者が集まり、トーナメント等に参加している。私が大学時代熱中していたラクロスでも「NYラクロス会」と称し、経験者が男女問わず世代を超えて、年に数回集まって交流を深めている。平日はもちろん週末も、論文の読み込みやプレゼンテーションの資料作成、技工で終わってしまい、会合への参加どころか英語すら一言も発せず週末を過ごすことが多いので、こうした会合は大学以外に「外界」との接点を保つという意味でも、貴重なリフレッシュの機会となっている。先日参加した際に、MBA留学中の後輩がしみじみ語っていたが、「確かにアメリカの高等教育の素晴しさは疑いようがない。しかし、日本での高校・大学時代の部活動、ラクロスなき人生は考えられない」という彼の意見には私も100%同意している。

NYU休日診療システム

専門医養成のためのPGコースでは、Emergencyとして年に2回、救急診療日が義務づけられている。日本では例えば休日診療や時間外診療に該当するであろう、休診日となる土日に、クラウンの脱離や歯が痛い、義歯が壊れたなどで急患として訪れる患者の診療を、補綴、歯周、矯正、エンド、小児歯科のレジデントが一人ずつ担当され、朝9時から夕方5時まで診療を行っている。こうした休日の救急診療を体験すると、日本とアメリカの歯科医療システムやドクターのスタンスの違い等がはっきりとわかって面白い。

NYUの歯科病院における急患の治療費は一律100\$である。さらに、ちょっとした痛みによる齶蝕の治療、義歯の修理であろうが、現在大学で治療中のケース以外はすべての処置に治療費が発生する。抜髄となると、患者は正規の治療費である700\$をその場で支払わなければならないので、その旨を説明し、もし痛みが我慢できる程度であれば、そのままの状態でお引き取り願うことが大半だ。

もちろん、ここは大学附属の歯科病院なので、一律に定められた歯科医療しか提供できないという事情もあるが、それにしてもほとんど毎回何もしないで患者を帰らせるのはなんとも忍

びない。おそらく担当のファカルティの責任問題になってしまう、のちのち面倒なことになるような治療はできれば避けたいといった思惑があるのだろう。よって、彼らは「初めから何もしないのが一番」と決め込んでいるフシがあるから、タチが悪い。診断のためのX線撮影にも100\$必要だが、智歯周囲炎や急性の根尖性歯周炎などで痛みの症状がある場合でさえ、X線も撮らずにほとんど処方箋を出して終わりにしてしまう。日本では歯科医師会が担当している休日診療という制度があり、開業医でも土日や祝日に診療を行っているクリニックは多いので、急な場合でもどこかに駆け込めばほぼ対応可能なのが一般的であろう。こうした視点でみると悪名高き(?)日本の歯科医療システム、救急医療のシステムは素晴らしく患者想いのシステムにすら感じてしまう。

安価な治療費が招く、安易な日本の歯科治療

とはいえ、もちろん日本の救急診療体制も手放しで褒められたものではない。「とりえず、仮歯を入れておきましょう」「とりえず、取れたクラウンをまたセットしておきましょう」「とりえず、入れ歯の修理をしておきましょう」といった治療が多くない



NYラクロス会の集合写真



NYU歯学部病棟ERの様子

だろうか。日本で診療していた頃は、毎日1割ほどが救急対応の患者であったように記憶している。治療自体は保険適応なので、治療費自体はかかったとしても数千円で済むのだが、そういう患者はたいてい痛みが出た時か、壊れた時にしか来院しない。以前にも触れたように日本では、「簡単に」「安く」「早く」をベースに患者の要望のままに、治療を請け負ってしまうことが多いので、「毎回、真面目に歯医者に通ったのに、気づいたら歯が悪くなっていった」といったケースも、全体を考えると治療を部分的にその場しのぎで行った場合に生じやすい。こうした事実は、日本の歯科医療の現場に潜む本質的な問題だ。“治療計画を立てず、とりえず患者の言うとおりに治療を希望する箇所だけ治療を行う”という意味では多くのアメリカの一般歯科開業医においても大差ないが、アメリカでは一定レベル以上の治療を受けたい患者には、専門医が対処するので、良くも悪くも患者は選択権をもっており、治療の質を選ぶことができる。

保険治療のやり直しで経営が成り立っている日本の歯科治療

日本では、治療費が安価であるが故に、医療者側もすぐに対応して数をこなそうとし、患者側も基本的にその対応で満足するケースが多い。だが実際は、その再治療によって歯科医院の経営が成り立っているともいえる。これは毎

日の診療が救急診療や応急処置を中心に行われていることを意味している。患者には一見、便利なシステムかもしれないが、患者の希望どおりに「安く」「早く」をモットーとして患者の満足感を満たしつつ、ある一定期間内にはほぼやり直しが必要になることが多い保険診療。考えようによっては体のいいリピーターとして患者を囲い込んでいるとも言えなくもない。保険診療を安価で劣悪な診療の言い訳、隠れ蓑にしつつ、経営の安定化を図ろうとする意図が歯科医院側にも透けてみえてならない。

実は非常に恵まれている(?)日本の歯科医師

こうした状況の中で、世界中から集う友人らの境遇を知ると、日本の歯科医療のあり方、成り立ちについて考えざるを得ない。ニューヨークに来てもうすぐ4年になるが、その間だけでもウクライナ、ベネズエラ、エジプト、シリア、リビア等の国々では政治や社会情勢が激変し続けてきた。彼らのほぼ全員がアメリカに残り、歯科医師や専門医になって永住することを夢見ている。家族全員、場合によっては母国から両親や親類を呼び寄せている者もあり、まさしく人生をかけてチャレンジしにアメリカに来ている。

私自身も、「日本の歯科医師」の置かれた立場として周囲の友人らと比較すれば、自らの道を自らの努力で切り

開かざるを得ず、状況を打開するのは決して容易ではなかったと言い切れる。だが所詮、私の目的意識は「自己実現」に過ぎず、仮にうまくいかず日本に帰ったとしても、そんなものは自分自身の「チャレンジ」という名の意味「自己満足」のためだけの留学だったのではないかという思いに駆られる。自費診療と保険診療、治療のクオリティではなく、制度そのものによってある程度保護され、「やり直し」で成り立っているともいえる日本の歯科医療は、そうした制度の上に巧妙なバランスで維持しており、むしろ日本の歯科医師は非常に恵まれた環境にいるのではないかとわが身を振り返ると、日本にいた頃はなんともぬるま湯な生活に浸っていたものだと思わずかしくなり、思い悩んでしまうが、それは考え過ぎだろうか。しかし以前述べたように、歯科医師側に日本人としての道徳心がベースにあるからこそ制度が存続しているのも事実であり、日本の歯科医師は患者側からもっと敬意を払われるべきなのだろうか。読者の皆さんも一度振り返ってみてほしい。あなたの今の生活や収入、社会的な評価は、あなたがこれまでに費やしてきた努力や、現在行っている治療のレベルに十分見合うものであり、ふさわしい対価であろうか。

本連載の裏話などを知りたい方は、
下記のブログを Check!
<http://nyupgpros2015.blogspot.com>